

真言と解釈 (18)

— 現世利益 —

金子大榮

現世への期待ということ、第一講として、現生十種の益と説かれてあるものはすべて、住不退転ということに落ちつくのであるということをお話したのであります。現生十種の益のことは、『現生十種の益』という書物を書いておられますし、その他色々ところで発表してきましたから、詳しいことは何かこれらのものを読んで下さい。

今日は第二に、現世利益ということ、現世利益のことにつきましても、今まで何遍も講演をしたことがありますし、そしてそれが記録されたこともあります。しかし、現世利益と申しますと、浄土教にとっては、何か付け足しのような感じがいたして、真宗の教義としましては、どうでもよいものであるかのように、付録か何かのように考えられております。それがどうも、もう一つ納得のいかないものが感じられるのであります。昔から、稲を作るのは米をとるのが目的であって、藁を作るのが目的ではない。往生極楽の米をとるのが真宗であって、現世利益は、水田にできる藁のようなものであるというふうに言われておるのであります。そうなんであろうか。あるいは利益という言葉から、利益、利子というようなことが考えられて、元金が往生浄土であって、往生浄土を願うておけば、それに付随してくる、まあ利子というようなものであるというふうにも思うてみたこともあるんですが、それではど

うにも、もう一つ徹底しないものがある。そこで、真宗の教えというものを、もう一つ根本的に考え直さなければならぬものがあるとすれば、現世利益ということであろうかと、こうも思うのであります。現世を利益すること、往生浄土の教えの意味は現世を利益することである。従って、本願を信じ念仏を申すということの他に現世利益の道というものは無いということではなれないと思っております。この現世利益ということは、和讃に十五種「現世利益和讃」というものがあります。それがまあ一番はっきりしているものなんでありますけれども、しかし「現世利益和讃」に説かれてあることは、『教行信証』では「化身土文類」の末巻全部が現世利益を説いたものであると言っているわけでありまして。しかしその説きぶりが違う。『化身土卷』の末巻では、現世利益を求めてはならない。現世を祈るというものは、邪道である。仏法でないということでありまして、現世利益というものを、厳しく批判する。これは宗祖親鸞には批判するというようなことが、鋭い批判というようなことはあまり無かったんではないかと思っておりますけれども、「化身土文類」を見ますというところ「外道の邪偽を教誡する」というような厳しいことを教えて、そして現世祈禱を非難してあるのであります。それは邪道である。外道であるというより、やはり邪道である。にもかかわらず、それを説明する文章は全て現世利益であります。だから、現世利益を祈るというようなことは間違いない。あるが、利益があるという。利益があるということを明らかにして、そして、現世を祈るということを拒むものである。だから現世を祈ってはならないということ、現世利益があるということは、似ておるけども、全く別なものであるということにもなるのであります。近頃は、この学校の先生たちによりまして、宗教というものとレリージョン (religion) と、うものが違うということが、かなりはっきりされておるんであります。西洋の宗教、レリージョンというものは、つまり結びつける、神と人間とを結びつけるとか、あるいはお祈りするとかいうふうなかたちのものであります。宗教というのは教えを領くものである。道を説くものである。と申しますれば、そういうことを、今用いますれば、真宗は仏教であり、もう少し広い意味において宗教であって、決してレリージョンではない

だということを明らかにするために『教行信証』を説かれているのであると、こういってもいいんでしょうね。まあここに色々問題があるわけでありませう。そういうことでして、今日はどこまで話が出来るか分りませんが、現世利益ということの意味を一つ明らかにしてみたいと思っております。

それには「現世利益和讃」というものを見ていかなければなりません。が、「現世利益和讃」は十五首あります。先輩はそれを三段に分けております。第一には鎮護国家の利益を明かす。始めの二首は、念仏というものは、阿弥陀仏の本願を信ずるといふことは、国家を安らかにし、鎮護国家といふことで鎮め、護る。国防、国を守ろうと思ふなら軍隊や鉄砲でなくして、今日でいえば、核兵器といふようなものでなくして、念仏を申すということが、それが国を鎮めるものであるといふことを言おうとするのであります。これはまあ、今日の理知からいふと、全く無知の思想であつて、お念仏称えたつて国家は安らかになるはずはない。やっぱり、軍艦と鉄砲でなくちゃならんといふことが、常識になつていふところへ、こういうことを言おうとするのですから、真宗や仏教のいふことは時代はずれといふことで文句を言われるかもしれません。そういうような知識的な平和に対しては別に何も言うことはありません。ただ事実といふのは不思議なものであります。国破れて、戦争に負けて、そして人心が落ち着かなくなつた。その落ち着かなくなつた時に、日本の人心を鎮めたものは、寺々で鐘を復活させたといふことであります。あそこでも梵鐘復活、ここにも梵鐘復活、鐘はみんなとられてしまつたのですが、そのとられた鐘をまた田舎で作る。そうするとそれが人間の心を和らげていく。鐘を作つて始めて戦後の人心が安まつたといふ事実があるのであります。論より証拠といふことがありまして、鎮護国家の論理なんといふようなことは分らんけれども、事実そういうことがあるんだといふことだけは考えておいていいんだらうと思ひます。要するに、東洋の思想といふようなものは、何かそういうような事実、事実を踏まえては、こう考えていったものに違ひないんであります。そこで、国を守り、国家平和のために念仏申すのであるといふことを説いたものが始めの二首であります。その二首の第一は、

阿弥陀如来来化して

息災延命のためにとて

金光明の寿量品

ときおきたまえるみのりなり

『金光明経』というのは、いわゆる鎮護国家の経典といわれたものでありまして、これによって国家が安まるといふことを説いた教典であります。この経典を読んでみるといかにもそうかなと思うように説いてあります。『大無量寿経』でも、この経が広まれば「国豊民安、兵戈無用」というてありまして、本願を信じ念仏を申すようになれば、戦争はやらないんだということを言っております。どうですか。こんなふうなことが、真面目に信じられる世界が一つある。そしておそらくそういうことが分らなければ世界の平和なんていうのは、永遠の夢にしかすぎないんだということもできるのであるかと思えます。その鎮護国家の経典といわれておる『金光明経』の「寿量品」というのはどういふことを言ったんでありまするか。『金光明経』には、金鼓の音ということが出て来ます。金鼓の音という題ではしばしば話しましたことがあります。金鼓というのは金でつくった太鼓ですわ。それをこう打つ、打つとその金鼓の音が懺悔の響きであった。その懺悔の響きが、人間自身に当って、そして人間生活の罪を懺悔するところに、そこに安らぎがあるんだというようなことが言うてあります。和讃の一首一首のここを説くことはやめますが、ともかくもそういうことで『金光明経』というものは、鎮護国家の経典として日本の古代におきましては大いに読まれた経典なのであります。

それからその次に、

山家の伝教大師は

国土人民をあわれみて

七難消滅の誦文には

南無阿弥陀仏をとなくべし

とあります。その『金光明経』の精神を實際にうつして、そして比叡山というものが鎮護国家の場所であって、そこで仏教の経典を読み、その経典の精神を明らかにすることが、やがて七難消滅の誦文であると。伝教大師に、何かそういうことを書いたものがありますわね。南無阿弥陀仏を称えて、そして七難消滅の誦文、おまじないになるということでもあります。こういうこの二首をね、親鸞聖人がまず最初にあげられたということは、どういふことなのでしょうかなあ。やはりそこには朝家のおんため、国民のために念仏申せとか、あるいは、仏法広まれ世の中安穩なれ、というような言葉がありますからして、そういうようなところにおいて、国家愛というものと仏法、世界の平和というものと念仏というもの、このかわりを感じておられたのであると行ってよいのであります。しかし、それだけが仏法であるということであってはならない。仏法を信ずればそうなるんだということであって、そうするために仏法を信ずるんだということであってはならないということが、それが比叡山を捨てて、そして法然上人の門へ入られた理由なのでしょう。だからして、一向専念無量寿仏の法然上人の門に入られたということは、それは、現世利益的な宗教に満足できなかったからであります。しかし、それゆえに現世利益というものは、ナンセンスであるということになったのではない。本当の現世利益というものは、何かそういうような御祈禱とか、あるいはお経を読むとかいうことでなしに、もう少し根底の深いところにあるんでなくてはならないということであったのだと思っております。現世利益を批判するということは、それによって真実の現世利益とは何ぞやということを明らかにするためであるということであったと考えるのが、真宗上の考え方であり、そうでなければならぬと思うのであります。

そうして第三首目に移りまして、第三首目と第四首目、これが非常に重要なものであります。第三首目は、

一切の功德にすぐれたる

南無阿弥陀仏をとناولれば

三世の重障みなながら

かならず転じて軽微なり

これは、重きを転じて、軽るきを受くるのだということでありませぬ。転悪成善ということも、あるいはこれかもしれません。「一切の功德にすぐれたる 南無阿弥陀仏をとناولれば 三世の重障みなながら かならず転じて軽微なり」とあります。そういたしますと、そう昨日ちょっと申しましたね。『歎異抄』の第七章の「念仏者は無碍の一道なり」という言葉、あの念仏は無碍の一道であるということは、『教行信証』では「生死即ち涅槃なりと証知せしむ」、生死即ち涅槃であるということが無碍であるということでもあります。念仏は無碍の法であるということね、あるいは「煩惱を断ぜずして涅槃を得る」ということが、これが無碍ということの意味なんでありませぬ。ところが『歎異抄』の場合にはね、念仏・念仏者が、無碍の一道におることが出来る、という意味であります。ちょっと申しましたように、念仏者ということについては、念仏ということも念仏者ということも同じことだということを、わたしが最初に岩波から出しました『歎異抄』に書いているのですけれども、多屋さんの国語学のほうからいうとそうじゃないということでもあります。「者」という字は「は」ということであって、だから「は」の字を入れたら「者」の字はなくてもいいんで、他のところにも、この「者」の字をつかってあるところはたくさんあったんですけども、みんな直して、そして「は」を入れてしまったから「者」がいらぬ。だから「念仏はまことに浄土にうまるたねにてやはんべらん」というところにも、「者」という字を書いた本があるというふうなことであります。そういうふうには、まあ国語学のほうからいえばそうなんでありませぬ。曾我先生は、念仏者ということは、人・法一体ということであるというふうなことをいうことは学者のいうことであって、そんなことではない。あれは、念仏というものはということであると、こう言うておられます。まあそういうふうには言われるんですから、そうなんだろうと思います。文章の上から

はそうなんでしょうけれど、ただそこにあらわされているものは、信心の行者、行者の無碍であるということであり、行くものに碍りが無いんであります。念仏そのものが碍りが無いということではなくて、念仏する者に碍りが無いということでもあります。だから「天神地祇も敬伏し」といわれるのでありましょう。念仏という法を無碍であると、こういうことを言うときには、煩惱にも碍げられないとか、あるいは生死にも迷わないとかいうことが普通でありましょう。「天神地祇も敬伏」するとうようなことを言う必要が無いのであります。言う必要が無いのを、それがあそこに出ているのは、要するに現世利益ということを読説くことであつたのであるなあと気がついたことでもあります。そうしますとね、この「天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍すること」がないということは、それは「現世利益和讃」でいうと、第五首目には、

南無阿弥陀仏をとなうれば

梵王帝釈帰敬す

諸天善神ことごとく

よるひるつねにまもるなり

とあります。それからその次には、

南無阿弥陀仏をとなうれば

四天大王もろともに

よるひるつねにまもりつつ

よろずの悪鬼をちかづけず

とあります。その次には、

南無阿弥陀仏をとなうれば

堅牢地祇は尊敬す

かげとかたちのごとくにて

よるひるつねにまもるなり

その次には、

南無阿弥陀仏をとなうれば

難陀跋難大龍等

無量の龍神尊敬し

よるひるつねにまもるなり

と、こうありますね。

そうしますというところ、その四首は「天神地祇も敬伏し」ですか。梵王帝釈は、印度で申しますというところ、世界創造の神でしょうかね。四天王は、人間を守る神ですか。それから堅牢地祇は大地の神。天の神、地の神。それから龍神は海の神。こういうようなことですから、梵王帝釈、四天王、堅牢地祇、諸天龍神ということが出されています。これは天神地祇も敬伏するということでしょう。

それから次にいきますというところ、

南無阿弥陀仏をとなうれば

炎魔法王尊敬す

五道の冥官みなともに

よるひるつねにまもるなり

とあります。それから、第十首目に行くと、

南無阿弥陀仏をとなうれば

他化天の大魔王

釈迦牟尼仏のみまえにて

まもらんとこそちかいしか

こんなふうなことですね、それをまとめて、

天神地祇はことごとく

善鬼神となづけたり

これらの善神みなともに

念仏のひとをまもるなり

とあります。あるいはもう一つ、

願力不思議の信心は

大菩提心なりければ

天地にみてる悪鬼神

みなことごとくおそるなり

とあります。そうすると、これをずっとみますというと、ここに並べてありますところの現世利益は、要するに「天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし」ということであります。だから、魔除けと、それから神々のお守りを受けるということが、これがもう庶民信仰なんですよ。民間信仰なんですよ。日本人の信仰というのは要するに、それより離れないと言ってもいいんでしょうね。よろずの善い神様から守ってもらい、悪い神様を封じるといって、こういうことが全体に掲げられてるのでありますから、すっかり現世利益のことが出ておるのであります。ところが『歎

異抄』の第七章では三番目に、「罪悪も業報を感ずることあたわず」と、こう言うてあります。「罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきがゆえに」という、この二つを思い合わせてみれば、やはり現世利益のことはないかと。現世利益としてみると、諸善もおよぶことがなく、また罪悪も業報を感ずることは出来ないという、その二つのところが、先程保留しました、

一切の功德にすぐれたる

南無阿弥陀仏をとなうれば

三世の重障みなながら

かならず転じて軽微なり

南無阿弥陀仏をとなうれば

この世の利益きわもなし

流転輪回のつみきえて

定業中天のぞこりぬ

と、いわれることではないでしょうか。一切の功德にすぐれておる南無阿弥陀仏であるということは、申すまでもなく、諸善もおよぶことがないということであります。その諸善もおよぶことがないというのはどういうことであるかという、罪悪も業報を感ずることはできないというところにあるのであります。だから罪悪も業報を感ずることはできないという、それはどういうことであるかという、三世の重障みなながら、かならず転じて軽微なり。あるいは「流転輪回のつみきえて、定業中天のぞこりぬ」ということでもあります。しかし、事実として我々はこれをどういうふうに感じたらいいのであろうか。これは昔からの講者ではですね、非常にはつきりしてゐるのであります。「三世の重障みなながら、かならず転じて軽微なり」ということは、これは人間の業というものは、「地獄は一定すみか

ぞかし」ということで、ほったらかしといたならば、地獄へも餓鬼へも、どれだけ重い結果にならんともかぎらないのであります。しかしながら、転重、重きを転じてすね、転重、受軽ということがあります。軽ろきに受くるということがありまして、これですましてもらうのであるということが、御利益であるということでありまして、これですましてもらうという、これはまあ、念仏を喜ぶ人の実感としてよく言われておる。病気というものがあっても、これで業を果たさせてもらうのであるということです。先日からしばしば申しますように、苦を逃れるということは、苦を受けるということである。素直に苦を受けていくところに、そこに苦を逃れるという道がある。苦を受くることにおいてそこに苦を逃れるということを感じるこのことができるのが、それが念仏というものであります。これらは全て実感でありまして、現世利益は理屈をいうよりは、念仏を称える人の実感に聞いてみると一番明らかであります。そういうことを訴える人が、始終喜ぶ人が手紙をくださるのですが、その喜びはみんな、未来の往生浄土のことを語りおうているのでありますけれど、喜びはいつも現世に来とるんであります。これですまさせていたただく、これで果たさしていただくのであるというふうな実感というものが、「三世の重障みなながら、かならず転じて軽微なり」ということでしょう。ほっとけば地獄いくか、餓鬼いくかわからない。それほど重き罪を持っているのであるけれども、おかげさまで、これですましてもらうぞというようなことが「三世の重障みなながら、かならず転じて軽微なり」ということであります。それと同じように「流転輪回のみきぎえて、定業中天のぞこりぬ」ということであります。お念仏申せば中天がなくなる。中天というのは中折で、死ぬはずじゃなかったのが死ぬ。事故で死ぬなんてことは、いわゆる人災で、中天であるとも言えるんでしょうね。お念仏申せば、中天がのぞこるということまでもわかるけれども、定業がのぞこるといえるのはどういふことであるか。私なら私が、六十で死ぬということが私の定業であるとすれば、それが八十まで生きたとします。そうすると定業までのぞこったということになります。それがつまり長生きさせることであります。長生きしたということは、つまりそれで人間の苦しき業を果たしてしまっただ

ということであるからして、もう再び迷わないということではなかりやならない。人生は人生としてこれで充分である。後の世に別な幸福を求めるといふのでなくて、人生は人生だけで、そこで充分であるという。そういうよろこびを与えるものが念仏であるということでありましょう。

そうしますと、「現世利益和讃」の始めの二首は鎮護國家の益、その次は念仏の利益、それからその次は特に信心です。「願力不思議の信心は」というところに、「大菩提心なりければ」という信心がいられています。これも第七章では「信心の行者には」といふてあるから別なものではないんでしょう。

南無阿弥陀仏をとなうれば

観音勢至はもろともに

恒沙塵数の菩薩と

かげのごとくに身にそえり

無碍光仏のひかりには

無数の阿弥陀ましまして

化仏おのおのごとく

眞実信心をまもるなり

南無阿弥陀仏をとなうれば

十方無量の諸仏は

百重千重圍繞して

よろこびまもりたまうなり

とあります。これは昨日も申しましたように現生十種の益の上におきますところの諸仏の証成護念、あるいは撰取不

捨というようなところに来るわけでありませう。ですから出発点は庶民信仰の民間信仰的な現世利益というものを念仏によって与えられるということであり、中心部をなしておりますものは、現世利益というものは、念仏の利益であって、念仏によって罪悪も業報を感じることは出来ない。諸善もおよぶことのない。だからして天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することは無いということですよ。

それから後の四首はことに他力の信心におきましては神様でなく仏様たちが百重千重してまもってくださいるのであるというふうにとらえておるのであります。まあ、これで「現世利益和讃」そのものについては、何も言うことはないんでありますが、しかし現世利益とは何ぞやということだけは問題であると言っているんであります。まあ自分の感じられたことをいろいろと話しましょう。まず第一に考えられることは、現世利益というのは現世が利益されるということである。現世における或る事が利益されるということではない。だからして、たとえば病気になるというところが、現世利益すると病気になるというところではない。だからして、たとえば病気になるということであるというようない。全てそういうことが精神的に了解されなくてはならんことなのである。精神的に了解されればそれでいいんじゃないであろうか。念仏すりゃ病気になる。あるいは病気になるって早く治るということは確かに念仏の利益であるということにははっきり言うてもいいんだらうと思います。もう一つ申しますれば、念仏を信じて仏法を信じている人は、病をどこまでも病として気にしない。病むときは病むがよろしく候と、こう良寛が言うております。有名な言葉ですがね。そして人々は良寛の言葉として伝えてるのであります。伝えてある限り、感心しているというところは、自分がそうなれるということかも知れん。けれども、病んでみない人にはおそらくは病むときは病むがよろしく候ということとは分らないだらう。病んでみれば達者な方がありがたいということも事実でありますけれど、病めば病んだということが有難いということも確かに言えるんであります。経験したことでお話しますが、ある女性の、一家の主婦でした。少し書物を読んだというふうな人で、女性としての、奥

さんの役がとまらんような人でなかったかと思うのですけれども、仏法を喜ぶようになられました。そして女性として、一人の婦人としての道というものを歩まれました。そういう人が怪我をした。怪我をされたものですから、さっそくお見舞状を出そうと思うていたら向こうから手紙が来ました。階段から落ちて怪我をしまして、ちょっと捻挫のようなことをしまして、一月もたたないと治らないそうでありまして、おかげで一ヶ月の間、せいぜい読みたいと思つていた書物を読むので、有難いことでございます、と。こう言うてこられました。こんなのがねえ、現世が救われるということでないんでしょうかな。現世利益ということは、病めば病むということがそれがよいことであるというようなことでないんでしょうか。ある人はこういうことを言われる。この人は外国へ行つて、そして交通事故に遭つた。汽車が脱線した。危なかった。危なかったけど、自分の乗つたる箱が転覆した箱でないので、幸いにして助かつた。(NHKで聞いたんですが)アナウンサーが、「ああ、そういうのは平生のお念仏の御利益ですか」と言うたら、こう言つた。「皆そういうことを言うから困る。わしはそれは現世利益があるとは思わない。もし、強いて言われるならば、それに驚かなかつたということが現世利益の有難さだと思つています。」そういうんでありますな。あれが平生仏法というようなものを聞かなければ、どれだけのろたえたかしらんけれども、おかげでそう動乱しないで落ちて着ていることが出来たのを、おかげさまであると思ひます、と。こういうようなことであります。そういうようなことはいくらでも出てくるのでありまして、それが本當の現世利益なんではないんでしょうか。現世をどうするのが利益であるかということになれば、常識から言えば、病める人がないようにということであり、今日のいわゆるヒューマンリストが考えるように、世の中に病人がないようにし、そして権力者がないようにする。食うに困る人間がないようにする。まあ餓鬼をないようにする。使う者と使われるものとの差別がつかないようにする。すなわち畜生がないようにする。そんなことが出来るでしょうか。そんなことが出来ることによって、果して幸福なんであろうか。権力の争いというものは、争つている限り、権力者というものはなくならないのではないであらうか。いかに共産とい

い、いかに社会主義といっても、結局、指導者と被指導者が出てき、そしてなんとかかんとかいうてそこに権力の差をつけなければおさまりがつかないことになるんでしよう。そうすれば要するに、人間の考えていることは、こういうことになりませんか。私は小さい家をもって、そして庭をもつていますが、その庭を見ておりますとね、時々やりかえたくなるんです。松の木をあそこに置いてはまずいからこっちにもつてくる。あの石ころはこっちにもつてきた方がいい。あのさつきはあそこに咲かすよりこっちがいい。やってみるんだねえ。やってみるといいんだ。いいけどいつまでもいいかというて、やっぱりものがよかったというふうなことになる。今日の人間の騒いでいることは、老人がそんなこと言うては失礼かもしれませんがね、要するに庭いじくっているような気がしてしようがないんです。ああしてみようか、こうしてみようか、こうしないではいかん、ああしないではいかん、というようにしないではいかんといっていることがいかにも、どうでもそうでなくてはいかんかのように言います。けれどもあそここのほうに窓が開いとらんから風通りが悪い、それじゃそこへ窓を開けよう。そうしたら冬が寒うなった。というふうなことね。「人間万事寒翁が馬」で、良いことがあれば悪いことがあり、悪いことがあれば良いことがある。それ全体を通じて有難い世の中であつたんだと。それ全体が皆、本当に人間にとっての幸福であつた。そう感ぜしめるものがあるとすれば、それこそ本当に現世利益というものでないであろうか。もしそういうことを考えるならば、そういう意味の現世利益というものを与えるものは、要するに、宗教に限り、念仏に限るんでないであろうか。だから現世利益を拒否するのではない。むしろ真の現世利益というのは何であるかということの問題とするときに、浄土を願うことの他に、現世利益を与えるものはない。ということではなければならぬのであります。念仏を信ずるものは何か社会に対しての働きかけがない。まあ昨年以來、色んな処の人に話してみても、そして出てくる問題がそれでしょうね。社会的働きかけがないということが、それがいかになんといっても消極的であつて、若い青年の不満足な点がそこにあるのである。従つて古いものは改革しなきゃならん、こう言うのであります。どうでも社会に働きかけがし

たいのならば、私なんかあるような気がするんだけどね。老人があまりそういうことを主張しちゃ悪いかしらんけれども、働きかけがひとつある。デモンストレーションをやりたけりゃね、それは平和のための本当のデモンストレーションでない。丁度昔、大徳寺や相国寺の坊さんたちがやったようにね。今でもやっていますか。雲水さんが朝「ウォー」と歩く。あれがいかにもこう、仏教的デモンストレーションというもの、こう考えることはできないでしょうかな。あれは赤旗をたてているのと違うのであります。世の中安穏なれ、京都の人々よ、落ち着いて働きなさいという、一つの運動でないでしょうか。そんなふうなことで、火煙ビンもったり、ゲバ棒もったりするのでなくて、むしろお念仏の旗をもってね、そして念仏をとえながら、ずーとこう、今日は平和な日や、今日は坊さん達の平和な日であるというようなことがやれんもんかな。もっと激しいことが欲しいならば、現世利益の迷信を退治するようなことであればありますよ。例えば、今どうしておられるか知りませんが、一時こんなことがありました。自動車に成田さんのお守り札が下がるとして。あれ見ると、それを外さなきゃ乗ってやらないという運動やっ人があります。今ではそれじゃまあ乗ってもらわなくてもいいということになったからいいですけどね。とにかく、あれがぶら下がっていると、それを外さなきゃ乗ってやらないと、自動車の走るの見て、そしてあれのついていないのに乗るといふような運動をやった人があります。面白いんじゃないかな。そういうふうなことが、あってもいいんじゃないかと思えます。さあこんな運動起こしたなら、真宗の信者でも、半分以上は逃げられるかもしれない。ここで話すとさしつかえあるかもしれないけども、真宗の大谷派でも盛んなところは名古屋ですがね。あの名古屋でもやっぱり日が良いとか悪いとかねえ。それから、方角が良いとか悪いとか、そういうことが非常に盛んですね。あれはどういうもんですか。私の知っているある旅館の人は、方角が悪いとかいう、そういうことを言う人の土地を皆買い占めてね、人の嫌がる土地を皆買い占めて、時によると墓場のあとを買い占めて、そして自分の旅館の拡張をやっている人がありますがね。そこまでいくと偉いもんだと私は思うております。それがちょっと出来ないことなの

です。人の嫌がるような、今日は方角が悪いとか、日が悪いとかいう、その悪い日を利用して金もうけをする方法考えるのも一つの方法かもしれません。根も葉もないことなんだからなあ。根も葉もないことが何かこう昔からの民族信仰としてでておるのであります。あの戦争なんざでも、軍人さんたちは偉いこと言うておったんですけれど、これは影で聞いた話で本当の話かどうか知りませんが、例えば、軍艦をだすということでも、八卦をおいてみたんだというようなことを聞いております。今日は軍艦を出して良いか悪いかということも占ってらってから出したというふうなことをやったということも聞いております。どういふ災いをおこすかもわかりません。だから、そういうふうなことをはっきりしたい。それもただ儀式的でなく、そんなことは不合理だということでもなくて、十分人間生活としてです。そういう現世利益、言い換えれば、悪い意味の利己的なことを捨てて、そして本当に人間道というものに立つ限りにおいては、現世利益があるんだ。というのは、先程申しましたように、事故に遭ってもうろたえなかつたというふうな、そういうようなことがあるんだ。もう一つ言えば、とんでもないことをやらなくてはならなかつたかもしれないけれども、それをしないで済んだんだというようなことが必ずある。「南無阿彌陀仏をとらうれば、十方無量の諸仏は、百重千重圍繞して、よろこびまもりたまうなり」という言葉があります。これはどういうことであるかというて、大阪の会でありましたか、考えられたことがあります。私は子供の時分に親父から聞いた話を思い出します。ある仏教信者がいまして、その人は一日中、お内仏に火をともししておる。よくそんな人があったもんですわね。私も何人も知っておりますが、そうまでする必要はないんでしょうけれども、とにかくそういう人がおった。その人がある日、非常に仲のいい友だちとの間に縫れが出まして、そしてすっかり腹をたてて、けしからん、一つなぐりつけてやろうという気持ちになって家を飛び出そうとして玄関口に立った時に、内仏に火のともっておるのをじっと見て、おやっと思いとどまったという話を思い出したことがあります。何か百重千重圍繞してということですね、何かこう、念仏の働きというものはそういう働きをもっておる。その話をしたんです。まあここで諸君たちに向ってお説

教するようでありますけれども、しかし私は、そういうことを自分も実感しております。そして学問するのですからね、そう信じてばっかりおれない。疑いが出てくるのであります。この前には疑惑ということについて色々話したのであります。色々言いましたけれどもいかに仏法の話をしていても、そうかしらんと。そうかしらんとするのは、外から言えば疑謗でありますけれども、内から考えれば、疑惑不信というものでてくるに違いありません。それが破れないんだ。十方無量の諸仏が百重千重圍繞してますからねえ。一人や二人なら破ることが出来るけれども、百重千重というような言葉が本当にピンとくるんですよ。破れない。破れないで「よろこびまもりたまうなり」ということで、また本筋道に帰ってくる。本筋道に帰ってくる時に、疑う心がかえって求道心となつて、わからないということが、わかりたいという道心となつてそして現生不退ということが成り立つのであります。もっと色々な事を思うておつたのですけれど、みんな忘れてしまいました。しかしこれだけみんなに話しておけばというのは、現世利益のあるのが浄土教であるということです。だから浄土の教えによつて与えられるその生活こそ、現世をあげての利益である。現世の或る事の利益ではない。病人だものが達者になるということが、それが利益でない。人生全体を利益するもの、よき人生であつたとか、悲しい人生であつたとか、つまらん人生であるとかいう、そういうことがかわつて、有難い人生であつたと、それが現世利益であろう。現世というものを見る場が出来たんですからね。だから現世それ自身としては、わたしはそれを弧というようなことで考えてみたことがあります。人間の生涯なんでものは、一直線じゃないね。弧であるか、曲線であるか、そういうものであります。しかし、念仏すればそれが円になる。どんな線でもね、平面の円にするか、あるいは球面の円にするか。何かこの、それは弧なるものである。与えられたものは弧である。円の弧ですね。与えられた人生は弧である。しかしながら信心によつて、念仏を信することによつて、そこにできたものは円である。弧である人生をして、円である人生にならしめるもの、それがつまり弧が利益されたということである。つまらんというその人生が、尊い人生であつたということに考えがかわるとするならば、そうすれば病むとき

は病むがよろしく候、死ぬときは死ぬがよろしく候。たしかに死ぬときは死ぬのがよろしい。これはまあ、あんまり若い人に話さんほうがいいかもしれないけれども。やはり、人間は生きる、長生きするということは、そのことだけを考えているというと必ずしもいいことか悪いことかわかりません。養老院の設備の完備しるところのなにがしの国では、実は自殺者が多いということがあります。ところが、一日一日長生きすれば、おかげで長生きさせていたできましたと言うことが出来れば、それが現世利益でなければならぬ。従って、その現世利益を感じしむるのが現生の利益であり、その現生の利益の機縁として現世の利益というものが感じられるのである。これで十分でなかったかもしれないけれども、この第二の講義において皆に研究してもらいたいことは、現世利益とは何ぞやということ。浄土教にあらずんば、本當の現世利益というものはないんだということにおいて、それにもかかわらず、現世利益を求めるところの宗教を排除しようということの矛盾でないという意味を明らかにすること、ちょっと大げさのようであるけれども、真宗学というものの一つの方向があるんであるところいうてもいいんであろう。簡単に言えば、仏教は宗とする教えであって、教えに従っての道であって、道の感覚である。いわゆる崇拜するか、あるいは神と人間を結びつけるとかいう、そういうレリージョン的なものでないということを明らかにしなきゃならないということにあるのであります。これでもう、現世への問題が済んだんですが、もう一つここで考えておかなきゃならないものは、それは還相、還相回向ということであります。まあその還相回向ということは死んでからもう一遍生まれかわってこなきゃならんというふうなことであって、大変に難しいことでありますけれども、しかしながら、要するにこれもまた、現在の問題であるということは明らかであります。これはこの次の問題にしましょう。

（本稿は、昭和四十四年十月二十一日の大谷大学における集中講義「真言と解釈」の筆録である。文責 編集部）